TEI 鼎談 DAN
学問と職業のカンケイから、大学進学を考える本
あなたは、まだ何にだってなれる。

筑波大学 国際総合学類

国際総合学類では、学際化、融合化教育をめざし、これまで蓄積された人類の叡智を、地球的視点で再構成して、新しい発想で諸問題に取り組むことができる文工融合型専門家の育成を目指しています。





■大学生
國井薫 さん



■先生
関根久雄 先生



■卒業生
飯田佑 さん

CONTENTS

●プロフィール　●大学生活について　●就職活動、仕事について
●5年後に向けて　●高校生へのアドバイス

●プロフィール

筑波大学国際総合学類の特徴を教えていただけますか？



■先生
この学類は筑波大学の中では比較的新しい学類です。昨年で30周年を迎え、いまの1年生が34期になります。本学の中では唯一「国際」という名前を冠していて、海外に目を向けることを主眼とする学科と位置づけられています。同じ社会・国際学群の中には国際総合学類と同様に社会科学をカバーする社会学類がありますが、社会学類は社会学、法学、政治学、経済学といった4つの分野の基礎的・理論的側面、いわば「dicipline」を重視しています。一方、国際総合学類では国際政治、国際法、社会開発などについて、社会学類よりもより発展的・応用的な分野をカバーすることが特徴です。とりわけ国際総合学類では、「グローバルな視野を持ち、地球規模課題の解決に向き合える人材の育成」に特化しています。さらに国際総合学類の場合、情報学や環境学もカバーしており、それらに関連するIT系の先生がいたり環境関係の専門家がいたり、理系的な要素も加味されています。政治、法律、経済、文化、環境情報の分野を広く学んだ上で、特定の分野についても掘り下げられる点が本学類の魅力です。

留学に関しても力を入れているとお聞きしました。

■先生

近年、筑波大学の中でも海外研修や海外を主なフィールドにした教育プログラムが増えており、国際総合学類の学生はそういった企画に非常に積極的に参加しています。交換留学以外でも、海外でインターンシップに挑戦したり、NGO 活動に取り組んだり、ほとんどの学生がなにかしらの形で国外につながりを持っています。

筑波大学は全国的にみても、交換留学先がとても多い大学です。国際総合学類は 1 学年に 80 名ほど在籍していますが、そのうち年間 50 名以上が海外に出ているのではないでしょうか。交換留学はどの年次でもチャンスはありますが、前年の秋くらいに応募しなければならないので、3 年生の夏か秋に出発するケースがほとんどです。留学の目的を学問的に明確化したり、単位の修得計画を考慮すると、2 年生で交換留学に出ることは、不可能ではありませんが、やや困難を伴うかもしれません。

國井さんも 3 年生の夏からですね。



■大学生

はい、私は 10 ヶ月間行かせていただきました。

留学自体は中学生くらいから考えていて、ずっと英語を勉強していたこともあり英語圏で生活してみたいと思っていました。現地の学生と同じレベルの授業を受けてみたかったです。この学類に来たのも交換留学の提携校が多いことが理由のひとつです。

米国のオハイオ州に留学しましたが、最初は英語がまったく通じずかなり落ち込みました。聞き取ることができずにうまくコミュニケーションが取れませんでしたね。3 ～ 4 ヵ月は授業も半分程度しか理解できませんでしたが、後半になるとだんだんと生活に慣れてきて友人もでき、なんとか 1 年間頑張ることができました。

■先生

一般的な交換留学はおよそ 8 ～ 10 ヶ月間です。最近は比較的短期の教育プログラムの中に交換留学がセットされていることもあって、その場合は 3 ～ 4 ヵ月ということもあります。学生本人が学びたい分野に沿って留学先を決めて、科目を履修することになります。交換留学先で修得した単位は、一定の条件がありますがこちらの授業単位に読み替えることができます。

実は国際総合学類で交換留学をしている学生は、ほとんどが 5 年間かけて卒業します。積極的に 5 年を選んでいると言ってもいいでしょう。就職活動時期とのズレが最も大きな理由です。3 年生の途中から留学を開始し、4 年生の 5 ～ 6 月くらいに帰ってくることがほとんどなので、その時はもう就活のピークは終わっていますよね。

■卒業生

私は先生がおっしゃったパターンよりさらに遅れていて、3 年生になってから留学を考え出し、周りが就活をしている時期に準備をしていました。4 年生の夏から留学に行き、帰ってきたのが 5 年生の夏です。その後、就職活動をして 6 年生で卒論を書き、卒業しました。半分ほどの学生が 5 年生までいると思いますが、6 年生までいたのは私の代では 5 名くらいでした。

■先生

学類内の学生が 4 年生で卒業することにはあまりこだわらない、5 年かかっても当たり前のような雰囲気があるからね。おおやけには推奨しないけども（笑）。

先生の研究分野を教えてください。

■先生

私の専門は文化人類学です。とりわけ途上国における開発の問題を文化の視点から考えることが専門です。

途上国開発はどちらかというと経済学からアプローチされることが多いですが、実際に開発の現場に入ってみると地域社会の文化が開発の行方に影響しています。それを人類学という「文化を専門とする学問」から考えてみようというのが、私の専門です。途上国開発を考えた時に文化の視点からどういったことが言えるのか、私の場合はそのことを南太平洋の島国をフィールドにして調査・研究しています。

■大学生

私は国際総合学類でグローバル経済を専攻しています。経済という枠組みではありますがゼミが経済専攻のため、今年は日本の地域経済をテーマに勉強していました。昨年辺りから「地方創世」「地方消滅」といったキーワードが出始めていて、地方の地域活性の状態を研究しながら、首都に一極集中する現状で地方は衰退してしまうのか、どうすれば生き残っていけるのかといったことを経済に絡めて調べています。

●大学生活について

筑波大学を選んだきっかけを教えてください。

■卒業生



筑波大学の存在を知ったのは、たまたま私の高校の担任が、この大学の卒業生だったというつながりです。当時から海外に関係する仕事をしたいと考えていたので、高校３年生の夏に国際総合学類のオープンキャンパスに行きました。

学類の学生が案内して下さったのですが、近くにいる他学類の方とも頻繁に会話を交わしていて学類の垣根が低いのかなと感じました。私は東京の高校に実家から通っていたので、東京に残る友人たちと離れすぎない距離で一人暮らしができる大学を探していたというのもありますね。

■大学生

この大学を志望したきっかけは、小学生くらいから英語を習っていたのと姉が国際関係の勉強をしていたのが大きいです、逆にほかの分野にはあまり興味を持てませんでした。国際関係を勉強したいという気持ちがまずあり、地元の新潟には国際関係を学べる国立大学がなかったので、一番近い場所を探したところ筑波大学に行き当たりました。

加えて、留学を希望していたので、留学のしやすさや提携校の多さ、学生の留学実績も魅力的でしたね。

オープンキャンパスには高校２年生の夏に来て、このキャンパスの大きさに衝撃を受けました。飯田さんもおっしゃっていましたが、先輩方が明るくて楽しげな雰囲気を感じました。

■先生

本学のオープンキャンパスでは、初めに教員たちが学類のカリキュラム、留学のこと、就職のことを分担して話しますが、その辺の話は高校生たちはあまり興味がないようですね（笑）。ですから、今、國井さんが言った「大学生の印象が良かった」というのは、教員による説明の後のプログラムの話でしょう。概要紹介を終えた後に模擬授業を二つ行います。日本語による授業と、もう一つは英語による授業です。

最後に国際総合学類の１年生が担当している新入生歓迎委員が、「国際総合学類の学生の日常や授業はこういう感じですよ」という話をします。留学していた人の体験談やキャンパスツアーも学生主体でやっていて、このコーナーが高校生にはとても受けがいいようですね。

学生生活はいかがでしたか？

■卒業生

筑波大学の１年生は多くが学生宿舎にまとまって住むので、同期の絆が急速に強くなるんですよ。24 時間、皆と一緒にいることが多いので、例えば終電がなくなった頃に誰かの部屋に集まって勉強しようという話になるなど、朝電車で学校に来て、授業やサークルが終わってそのまま帰るような大学生活に比べると濃密な時間を過ごすことができました。

■大学生

女性も１年生からアパートに住む人は少ない印象です。私も留学までの２年半は宿舎住まいで、フロアで仲良くなってみんなで鍋をしていました。

■先生

１年生が大学に馴染むには宿舎に入った方がいいかもしれないね。

■卒業生

５月には「やどかり祭」という学生宿舎の文化祭があって、宿舎の駐車場を使ってお店を出したり、浴衣コンテストをやったりしています。そういったことを通して仲良くなっていく感じですね。

サークルや部活動などはされていましたか？

■大学生

１年次から留学の直前までサークル活動で、吹奏楽団のアルトサックスをやっていました。中学生から吹奏楽部に入っていたので大学に来ても続けたいと思っていたんです。



■卒業生

筑波大学は体育会がとても強いイメージがありますね。私自身は高校時代から登山をやっていて、大学のサークル活動でも続けていました。週末に１泊２日で登ったり、夏休みに１週間程度の縦走をしたり、あとは山小屋でアルバイトもしました。

■先生

国際総合学類の場合は、一般的なサークル以外に国際系サークルというのがあって、そこに入っている学生もたくさんいると思います。例えば茨城県の牛久市に、法務省入国者収容所東日本入国管理センターという、難民認定を待っている外国籍の人たちを収容する施設があります。そこの人々の厳しい生活を支援する「CLOVER」という団体は学生が立ち上げたものです。また「模擬国連」という団体もあり、例えば国連の場でそれぞれがブラジルやアメリカという国の代表になったつもりで自国の主張をして、シミュレーションする活動をしています。ほかにも国際問題に関するディベートをする団体や、インターンシップを支援する団体もあります。これらの活動では、しっかりと事実を調べなければそもそも討論や対策といったことができないので、学習の助けにもなると思います。

入学後にためになった講座や授業はありますか？

■卒業生

経済や政治などの分野の基礎学問を必修で学ぶ「国際学概論Ⅰ～Ⅴ」が印象に残っています。国際

経済なのか政治なのか、はっきりとした方向性がない状態で入学したので、講義で最初にイントロダクションしてもらったのはその後の進路を考える際に役に立ちました。高校までの授業は決まった教科書であったり指導要領に沿って進められると思いますが、大学では先生個人のお考えや研究内容、政治的な思想がそのまま授業で出てくることに衝撃がありました。例えば今のシリアやウクライナ問題に関しても、先生がおっしゃることが必ず正しいというものではなく、こういう見方もあるし、また別の見方もあるということです。
履修登録も学類の壁はなく、国際総合の枠を越えて自分の興味関心で授業を受けられる裾野の広さが良かったです。

■大学生

私も「国際学概論Ⅰ～Ⅴ」はためになりました。
あとは今のゼミの先生が教えていた「世界経済史入門」はグローバル経済を学ぶにあたってとても役立ちました。例えば私たちが気軽に手に取っているコンビニのおにぎりが、実はアラスカの海で過酷な労働をしている人たちが鮭を獲ってくれていることで供給されていたり、洋服や工業製品の製作の裏には南北問題が隠れていたりといった事実は、物の見方を変えてくれました。毎回、授業の後には内容に関連した映画を観ますが、15 時くらいから開始して 18 ～ 19 時くらいまで時を忘れて鑑賞していました。
「メディアポリティクス」という政治の授業では、グループごとに政党を作ったことも面白かったです。自分たちで政党の PR ビデオを製作して、最終的には英語でほかの政党の前で自分たちの政策を話すのですが、グループには留学生もいたので話し合いの段階から語学やコミュニケーションの勉強になりましたね。

●就職活動、仕事について

就職活動で心がけていたことはありますか？

■卒業生



自己 PR 等面接で何を話すかといったことよりも、とにかくたくさんの企業を見に行こうということですね。バネや鉄など、企業間で取り引きされるような製品を造っている会社に普段は関わる機会がありませんが、就職活動中であれば様々な物を見せてくれますし、聞けば何でも教えてもらえます。こんな贅沢な時間を逃す手はないなという気持ちでした。私は国際関係の仕事ができる企業を希望していましたが、例えばスクラップ等を溶かして鉄にする電炉メーカー、バネのメーカー、自動車用のスパークプラグの製造メーカーなど、あまり意識したことのない企業にも行ってみました。そこで見聞を広めておくことが、社会に出てからも使える知識になることがあると思うので、とにかく自分の中で間口を狭くしないことを意識していました。これから大学生になる方にも、マスコミ業界に行きたい、金融業界で働きたいといった希望があると思いますが、志望の業界だけではなく幅広く考えていてもらいたいです。

■先生

インターンをしている学生もいますね。
国際総合学類は、特定の業界に卒業生が集中するということはありません。まんべんなく様々な業界に就職しています。ただ、海外展開に積極的な企業が就職先としては多いという印象があります。JICA や青年海外協力隊に行きたい人は、他学類に比べれば圧倒的に多いと思います。

■卒業生
そうだとうれしいです。青年海外協力隊は、政府開発援助 (ODA) の一環として JICA が実施する事業ですが、開発途上国等からの要請を受け、その要請に見合った知識、技術、経験等を持った方をボランティアとして派遣し、現地で活動して頂くものです。社会経験を積んだ上で応募されるケースも多いですが、大学への在学中或いは卒業後すぐに応募し、派遣されている隊員も数多くいます。

●5年後に向けて

将来の目標について教えてください。

■大学生
今年の春に公務員試験を受けて、地元の新潟県で働きたいと考えています。県と海外をつなぐインバウンドの仕事を、公務員の立場でできればと思っています。希望としては県庁に入って国際観光科で観光誘致や、もともとある文化を観光資源としてアピールしていきたいですね。

■卒業生
私は留学していたこともあって中央アジア地域に思い入れがあります。色々経験をしつつ将来的には中央アジア人材として育っていきたいです。国際協力の業界では、特定地域に詳しいということだけではなく、むしろ例えば保健や教育など、何らかの課題に強みを持つことが求められます。自分が今関心あるのはインフラや運輸ですが、地域的な知見プラス課題の知見を合わせ持つ人材になれればと考えています。

■先生

これまでオセアニアの島国から国際開発、国際協力といったものを考えてきましたが、自分の中ではある程度の決着がついたかなと思っています。次は国際協力や途上国の貧困削減というものを、ビジネスの文脈の中で捉えていくことを考えています。国際協力は“してあげる”とか“与える”といった慈善的なニュアンスが強いのですが、これでは持続性がありません。そうではなくビジネスという文脈の中で「支援する側、される側という国際協力の構図を変えて捉える必要があると考えています。JETRO（日本貿易振興機構）のアジア経済研究所の研究プロジェクトで「コンビニと貧困削減」という研究会にも参加していて、日本型のコンビニがどのように貧困削減に活用できるかという試みを展開しています。これまでは南の島国が研究対象でしたが、これからは日系コンビニが多く進出している東南アジアもフィールドになるかと思います。日本型コンビニの特徴は「流通」にありますが、他国に同じ物を求めるのは難しいので、どのようにローカライズすることでそれが内在化していくのかも見ていきたいですね。
あとはこれまで通りソロモン諸島の現代的な要素のひとつとして、どういった「正義」が近代社会の中にありうるのか、作られようとしているのか。近代化の過程の中で、正義のあり方もだいぶ変わっていくだろうと思っています。西洋近代ではない近代のひとつの姿をソロモンというところから、「正義」という視点から捉えていきたいというのが２つ目です。

●高校生へのアドバイス

高校生の時期にやっておいたほうがよいことはありますか？

■先生

国際関係の道に進みたいのであれば、まずは新聞の国際面などで国際情勢を見るということではないでしょうか。世界の情勢に対してまずは自分なりにどう思うのか、意見を持っていた方がよいですね。関心を向けて、考えるクセを身につけるということです。

これは色々な分野に言えることです。実際に大学入試の面接でも重視されるのは“考えているかどうか”ですから。間違っていても、自分の頭をひねって言葉を出しているかどうかが大きなポイントです。

■卒業生

私は父親の仕事の関係で、中学校を卒業するまでは中国の北京にいて、高校入学時に日本に帰ってきました。こうしたバックグラウンドがあったため、海外で何かをやりたいというのも、高校生の前半までは中国を念頭に置いていました。育った場所に関わっていきたかったという思いですね。

しかし、大学に入ってからはいろいろな先生の影響を受けました。特にロシア政治の講義をされている先生は、ご自身のロシアでの体験を学生に響くように伝えてくださって、そこで初めて旧ソ連圏が気になり始めました。それがきっかけとなって、旧ソ連の中央アジアにあるタジキスタンという国に留学することになりました。

高校生の初めまで自分の知っている物事だけをベースに考えていましたが、その外には知らないことが山ほどあります。自身も、高校生のうちにそれに気が付いていればもっと考えを深められたかなと思います。今高校生の皆さんには、左右を見たり知らない場所に行ったり、未知の物事にもどんどん首を突っ込んでみることが大事だと思います。

■大学生



高校生の当時は吹奏楽一直線でほかのことに目が向いてなかったですね。海外にも行ったことがなかったです。国際関係を勉強したいと思っていた割には、新聞を読んでいたわけではないですし、本もあまり読んでいませんでした。

大学に入っていろいろな友人に会う中で、様々な知識を持っている人に圧倒されて自分はまったく知識がないなと初めて気づきました。やはり様々な考えを持つ人と交流を持つということは大切です。

受験勉強に関して言えば、私はセンター試験では平均的に点数がとれるようにくまなく勉強しました。二次試験で英語と地理を選択して、特に地理はセンターが終わった後に勉強を開始したため、ほぼ毎日地図を見て特色を言えるようにしたりしていました。

自分で進め方を計画して、自分のペースでやっていくことが大切ではないでしょうか。

気晴らしには音楽が好きなので聞いたり、部屋にあるピアノを弾いたり、友人と買い物に行ったりしていました。

高校生の頃の学びを将来に結び付けるには？

■先生

なかなか高校生に説明するのは難しいですね。三角関数が将来において何の役に立つのか、といった発想は実学的ですよね。おそらく直接的に役に立たないとしても、国語であれば問題をどう読み取っていくかという風に思考を巡らし、頭を使っていくことが大事です。特殊な職業にでも就かない限り、実学的な観点で勉強することはおそらくあまりないでしょう。しかし、それでも「やる」

ということはあくまでも頭のトレーニングという風に割り切って考えることが正しいのかなと思います。これは自分自身も、高校生になって勉強し出してからは成長したなと感じる部分があるから言えることですね。

最後に、改めて国際総合学類の素晴らしさを教えてください。

■先生

裾野の広い学びが得られることは先ほど話した通りですが、それ以上に学生が財産です。明るく、何事にも積極的で行動力があり、国際総合学類生どうしの結びつきが強く、豊かな創造性を備えた若者たちです。また、国際問題はもちろんのこと、身近な社会問題に対しても高い関心を寄せ、自分の意見をしっかりと持ち、その内容を論理的に表現する思考力とコミュニケーション力を備えた学生たちです。そのことは、多くの学生が在学中に留学したり、国内外でインターンシップを行ったり、社会貢献活動を行ったりしていることにも現れています。誰でも暖かく迎え入れ、日々の活動の中で互いに刺激し合いながら志を高め合うことのできる場、それが国際総合学類です。

■卒業生

筑波大学はとても国際的なつくば市の中にあることも魅力です。

例えば学生宿舎に行くと、外国の留学生やその家族がコミュニティを作っています。私自身も筑波大学の中にいるタジキスタン等中央アジアから来た留学生たちと関わることで、現地の情報を教えて頂いたり、自分のロシア語の勉強をしたりすることができました。その縁がきっかけで私がタジキスタンに留学した際には、現地の方の家に 1 年間下宿させてもらいました。留学に行く、行かないに関わらず、こういった環境に居続けられることが隠れた魅力だと思いますよ。

●インタビューに答えていただいた方々●



■先生

関根久雄先生

筑波大学社会・国際学群国際総合学類学類長

私立法政大学第二高等学校出身。法政大学文学部史学科卒業。学部卒業後民間企業に就職。その後青年海外協力隊参加。帰国後、広島大学大学院修士課程進学。総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程単位取得退学。名古屋大学助手、筑波大学講師、助教授を経て現職。



■卒業生

飯田佑さん

JICA（独立行政法人 国際協力機構）職員（2015 年度取材当時）

国立東京学芸大学附属高等学校出身。筑波大学社会・国際学群国際総合学類卒業。現在は東・中央アジア部、中央アジア・コーカサス課に在籍。無償・有償資金協力や技術協力、ボランティア派遣などの政府開発援助 (ODA) を通じ、開発途上国の経済や社会の発展に貢献したいと考えている。



■大学生

國井薫さん

筑波大学社会・国際学群国際総合学類グローバル経済専攻 4 年生（2015 年度取材当時）

新潟県立新潟高等学校出身。3 年次の夏より 10 ヵ月の米国交換留学を経験。現在は、コンビニ製品や工業製品といった身近な物から経済の仕組みを探るゼミに所属し、グローバル経済を学んでいる。